中高生とともに差別と闘う

『キレイゴトを貫く』

吉成タダシ

二〇一六年成人式祝辞

「（前号からのつづき）今、国や文部科学省は、チーム学校、アクティブ・ラーニングといった教育手法を、新たな手法として提示しはじめました。集団で協力するということ、集団で学び合い課題を解決していくということです。その必要性や大切さに気づいたからです。みなさんにとっては、新しいことでも何でもありません。あの時すでに実践していたからです。つまり、時代を先取りしていたわけです。

そんなふうに舵を切ったのが、二〇一一年三月十一日、みなさんが卒業した日でないかと思います。みなさんの多くは、一九九五年、阪神淡路大震災があった年に生まれ、二〇一一年、東日本大震災があった年に義務教育を修了しました。あのときテレビ画面に映し出された映像を、今でも私は忘れることができません。

東北三県、東日本、全国の人々が何度も口にしたキーワードは、「家族、絆、故郷」でした。みなさんと学び合ってきたテーマと、そっくり重なりました。あの震災から学ぶよりも前から、みなさんはこれらのテーマについて徹底して自分を語り、その思いに真剣に耳を傾け、絞り出すように思いを返し合っていたのです。特に、三年生、二月二十四日の最後の道徳の授業は圧巻でした。一人一人が、書いたものを読むのではなく、自分の言葉で、自分の思いを切々と、涙をこらえて語り合っていました。限りある時間ですから全員は無理でしたが、それでも仲間の声に、誠実に耳を澄ましていました。教師からのお説教や言い聞かせではなく、卒業直前まで、自分たちで語り合う授業を作りあげ、その絆を確かなものにしていったのです。本当に立派でした。そんなみなさんは、私にとって誇りであり、希望です。（中略）

私には私のストーリーがあります。お家のみなさんにはお家のみなさんの、そしてみなさんにはみなさんなりのストーリーがあります。今日は、そのストーリーのなかの成人式という大きな節目だということです。あの立派だったみなさんの卒業式。その大きな節目と同じように、それ以上に、大切に見守り続けてくださったたくさんの方々に、心を込めて感謝をする一日です。私は、みなさんに感謝をします。今日という日を迎えることができたことが、私にとって何よりの喜びです。本当にありがとう。そして、おめでとう。」

出会った限りは一生もの

今年成人を迎えた子たちの多くは、阪神淡路大震災の年に生まれ、東日本大震災の年に義務教育を修了しました。それは、本人だけでなく、お家の方にも忘れられない記憶であり、全国すべての成人式でも聞かれたお話ではないかと思います。私にとっても、どちらの年に担任した学年も、忘れがたい子どもたちです。

祝辞にも述べましたが、私は子どもたちにいつも、「成人したら、一緒に飲みに行こう」と言います。中学生には実感のない話で、「この先生は何を呑気なことを言ってるのか…」といった感じで笑われるのですが、これは別の言い方をすれば、「あなたとの関わりは、この一年だけじゃないからね。一生のつき合いだからね」というメッセージを送り続けることでもありました。

「出会った限りは一生もの」

担任や在学をしているときだけの短いつき合いではなく、これから先の長い人生の、良き相談相手であり、良き仲間であれたらと思うのです。

キレイゴトを貫く

学級もそうですが、学年や学校の枠を越えた、「集団で語り合う人権学習」に長年取り組んできました。そして、子どもたち自身が語り合うことの意義についてずっと考えてきました。その意義はとてつもなく大きく、学級担任一人の頑張りでは決して得られないような、大きな大きな学びではないかと思っています。

でもその一方で、「受験生にもなれば、道徳・学活の時間はない」という残念な話を聞くことがあります。「受験生なんだから、そんなことをしてる時間があれば受験勉強や自習をさせて」という声が聞かれることもあります。確かに受験は大切でしょう。でも、道徳・学活も同じくらい大切なはずです。受験科目の授業を自習にして進度が遅れたら、みなさんはどう感じるでしょう。だからといって受験科目でなければ、授業は飛ばしていいものでしょうか。それではまるで、教科に優劣をつけているようなものではないでしょうか。受験科目は大切で、そうでなければどうでもいい、なんておかしいですよね。受験科目であろうがなかろうが、どの教科も等しく大切だからこそあるのです。なのに、受験が近づいてきたから、「受験に必要じゃない教科は飛ばす」というのは、学校や教師が、教科の優劣を認めてしまっているようなものです。もしそんなことをしてしまえば、「それまで真剣に語り合い、学び合ってきたことは何だったの？」と、子どもたちの思いを裏切ってしまうことになってしまいます。そんな不誠実な姿を見せるわけにはいきません。本音と建て前を教師の勝手な都合で使い分けるような、そんな教育であってはいけないと思うのです。キレイゴトと言われるかもしれません。世の中そんなに甘いもんじゃないと言われるかもしれません。でもそんな現代だからこそ、教育の世界では、キレイゴトを貫きたいと思うのです。

この学級も、毎週の道徳・学活を欠くことなく、卒業直前まで主体的に語り合っていきました。その時間を過ごすことで、紡いできた互いの絆をよりいっそう深め、輝きを増しているかのようでした。そしてそのつながりが、学力も伸ばしてくれていたように思えるのです。

（次号「ラスト道徳」）

イラスト　中島　亜唯